

「後期高齢者の仲間入り」

2016年04月19日

今日、誕生日を迎え、後期高齢者の仲間入りをした。子どもの頃は、75歳ともなれば、相当の人が死んでいた。自分がその歳になって見ると、やはり年取ったと思う。体力、知力の衰えは歴然とし、長続きせず忘れ物が多いのには我ながら情けない。75年間も使ってきた訳だから、消耗したのは当然である。しかし、なんとか元気で生きられるのは有難い。

私の人生は六つに区切られる。① 旧満州の大連市で生まれ、引き揚げまでの6年間。② 大分県杵築市で暮らした13年間。③ 東京で過ごした10年間。④ 宮崎県延岡市での8年間。⑤ 埼玉県熊谷市での約4年間。⑥ 横浜市での教会31年と隠退して2年の33年間。

① の大連時代は幼かったので、記憶は少ない。5年前の6月に大連を訪ねた時、アカシアの甘い香りを懐かしく思い出した。1945年の敗戦までは落ち着いた生活であったが、その後は激変した。銃を持った大きなソ連兵が2人、「時計を出せ」と土足で家に上がり込み、恐ろしかった。父が話しをつけ、何も取らずに帰って行った。引き揚げ時、列を組んで歩いたことをテレビで観る難民の姿と重なって思い出す。

② の杵築時代は13年間だが、最も印象深い時代である。家族7人は無一文からの生活で貧しかったので、子どもでも働くことは当然とされた。高校生時代「青春の嵐」に見舞われ、苦しみ、自分自身を受け入れることができず、また社会の非情、理不尽に生きる意欲をなくしていた。それがキリスト教信仰との出会いになった。主イエスの十字架に「よし、生きよ」という神からの是認の福音を聞き、生きる喜びと勇気が与えられた。この喜びは大きく、福音を伝える牧師になる決心をした。

③ の東京の10年間は楽しかったが、苦しい時でもあった。両親は牧師になることに反対していたので、神学校の6年間、自活せざるを得なかった。週に5、6日、家庭教師のアルバイトをし、勉強は電車の中だった。しかし、志を同じくする友との学びは楽しかった。ようやく卒業し伝道師になった。結婚し子どもも得た。しかし、私には理解できない問題を持ち込まれ、教会闘争も激化し、混乱した。うつ病になり、入院、転地療養などをして、苦しんだ。この病気は貴重な体験となり、その後の牧師生活に生かされた。

④ の延岡時代は延岡三ツ瀬教会の牧師となり、心身に障がいを負う教会員と交流を深めた。主イエスは悩み悲しむ者と共におられ、彼らを生かされる福音の力を知らされ、牧師の道に光を示された。当時、障がいを持った高校生が礼拝に来ていたが、彼から3年前、「先生は、あの頃、体から振り絞るようにして説教していましたね」と言われた。

⑤ の熊谷教会時代は幼稚園経営も加わり、忙しかった。熊谷の人々は地域を誇り、よそ者を受け入れない閉鎖的な印象があった。最近、東京のベッドタウンとなっているようだ。十分な奉仕ができず、辞任したことを申し訳なく思っている。

⑥ の横浜時代は、神学生の時からの希望であった開拓伝道に取り組んだ。伝道は実を結び、会堂建設も完成することができた。開かれた教会で、多様な人々との出会いに恵まれ、楽しかった。引退後は、地域の人々と「人権や平和」を守ろうとする市民運動に関わっている。心優しい人々で、何と福音的であるかと感激することが多い。

75歳まで生かされ、牧師として用いられたことに畏れを持って感謝している。人生には無駄がないというのが実感である。そして、妻に支えられてきた。後期高齢者になれば、いつ死んでもよい歳であろう。しかし「お迎えはいつでもいいが、今日はダメ」という川柳に頷く。後、何年生きるができるかは分からないが、主イエスの福音に従い、人間の尊厳を守り、平和を実現する働き的一端に加わっていきたく願っている。